



孵化後1年程のオオサンショウウオ



観音堂

歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 せと 歴史と文化財を知る見学会 「まちめぐり 下半田川地区」

日時：平成29年12月9日(土)

見学コース：①午前10時00分 ②午後1時30分 下半田川町民会館駐車場集合

(予定時間)	10時10分	1時40分	庚申堂
	10時30分	2時00分	伝代官屋敷跡(秦川城跡)
	10時50分	2時20分	オオサンショウウオ人工巣穴
	11時20分	2時50分	蔭昌寺跡・明月庵跡
	11時40分	3時10分	八剎社・観音堂(木造阿弥陀如来立像・木造十一面観音菩薩立像)
	12時00分	3時30分	下半田川町民会館駐車場・解散

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

やきものの生産
の変遷

今回見学する文化財とその関連年表

本地大塚古墳(西本地町2丁目)

宮地古墳(上之山町2丁目)

広久手第30号窯跡

古瀬戸瓶子(寺本町)

陶製狛犬(深川町)国

瀬戸窯跡【小長管窯跡】(東白坂町)国

永享年銘梵鐘

聖徳太子絵伝(塩草町)

定光寺本堂(定光寺町)国

織田信長制札(窯町)

菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]

瀬戸窯跡【瓶子窯跡】(鳳山町)国

源敬公廟(定光寺町)国

笠原村・両半田川村国境争論絵図(東松山町)

石造地藏菩薩立像(片草町)

陶質十六羅漢塑像(寺本町)

六角陶碑(藤四郎町)

旧山繁商店(仲切町・深川町)国登

瀬戸永泉教会礼拝堂建造(杉塚町)国登

陶製梵鐘(深川町)

古墳	5世紀	飛鳥	須恵器
	6世紀		
奈良	7世紀		
	8世紀	平安	灰釉陶器
鎌倉	9世紀		
	10世紀		
	11世紀		
南北朝	12世紀	室町	山茶碗・古瀬戸
	13世紀		
戦国	14世紀	江戸	大窯製品
	15世紀		
近代	16世紀	(明治) (大正) (昭和)	連房製品
	17世紀		
	18世紀		
	19世紀		
20世紀	20世紀	21世紀	蛇が洞川流域にてオオサンショウウオの生息を確認
	21世紀		

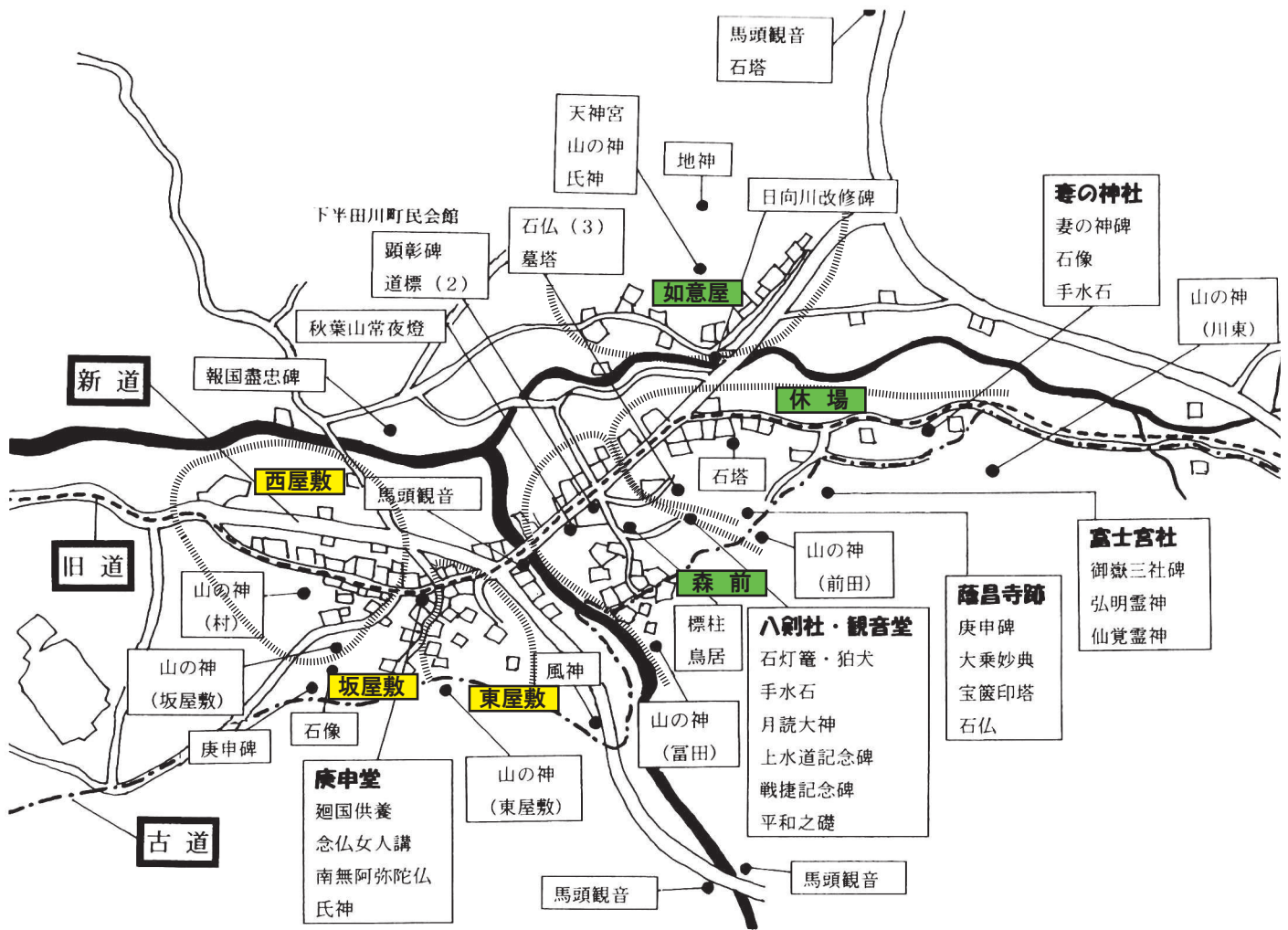
木造十一面観音菩薩立像造像(県指定)
木造阿弥陀如来立像造像(県指定)

下半田川C窯操業

蔭昌寺創建

ひおも
日向窯操業

観音堂再建
阿弥陀堂(明月堂)建立→焼失後、下半田川分校開校
庚申堂建造(江戸時代以前に存在?)



下半田川の石造物とシマ

(松原 脩 2002「下半田川」『瀬戸市史民俗調査報告書二』より作成)

① 庚申堂 (明治 10(1877) 年～)

川西の坂屋敷にある庚申堂は、明治 10(1877) 年前後にコレラ・はしかが全国的に大流行した折、村を疫病から守ってもらうために建てられたものと伝えられています。

堂宇は、2 間×2 間の側柱建物で、屋根は寄棟となっています。もともとは萱葺^{かやぶき}でしたが、平成 9 年にトタン葺きとしています。南側に開口し、入口は上半が内^{しとみど}上げの^{はんしとみ}部戸(半部)となっています。現在堂内には 2 つの祠状の内陣があり、2 枚の棟札が納められています。棟札は、文政 2(1819) 年に再建されたとするものと、昭和 40 年に修理されたとするものが確認されます。現在の庚申堂の東側には、礎石らしき石材や平場もあり、他に村内には庚申堂が建てられていた記録や伝承もないため、江戸時代以前にも庚申堂がこの地に立っていた可能性が高いと思われます。



坂屋敷の庚申堂



庚申堂棟札 (文政 2(1819) 年再建)

② 伝代官屋敷跡（^{はだがわ}秦川城跡）（15 世紀末～ 17 世紀前葉）

川西の東屋敷の山裾には、江戸時代よりも古い時代に古道があったと言われています。その古道沿いに、「秦川城跡」及びそれに付随する「代官屋敷」と呼ばれる平坦地が所在します。江戸時代の村絵図（寛永 4（1643）年、天保 12（1829）年）にも、南側の山中に「^{やぐらば}櫓場」と呼ばれる場所があります。1923 年刊行の『東春日井郡誌』には、「尾関 秦」という美濃池田城主安藤景照の家臣で、天正年間（1573～92）に下半田川村に住した武士がおり、安藤氏に従い長久手の戦い（天正 12（1584）年）で戦死したとする伝承が記録されています。

「代官屋敷」と伝えられる地点は、「尾関屋敷」「殿様屋敷」とも呼ばれ、山中腹の秦川城を守った尾関氏の屋敷地であったと考えられますが、現在残る石垣が当時のものであるか詳細は確認されていません。

③オオサンショウウオ 国指定特別天然記念物



世界最大級の両生類オオサンショウウオは、日本固有種であり国の特別天然記念物に指定されています。ヨーロッパでは、既に絶滅し約 2,300 万年前の地層から化石が発見されていましたが、江戸時代後期に来日したシーボルトにより伊賀（現在の三重県）に生息するオオサンショウウオが確認され、化石の時代から姿が変化していない「生きた化石」とも称される生物です。その生息地は岐阜県東白川村や愛知県瀬戸市を東限として西日本に分布しており、成体の体長は 70～80cm に及び、中には 1m を超えるものもみられます。自然環境の良好な山村の清流に生息しています。

瀬戸市の蛇が洞川流域では、平成 3 年瀬戸市理科教育研究会により初めてオオサンショウウオが確認され、河川工事に伴う調査や東山動物園の調査、NPO「名古屋水辺研究会」の勉強会、「サンショウウオを愛する会」（平成 24 年度から「瀬戸オオサンショウウオの会」となる）の保護活動などを通じてその存在が明らかとなり、平成 18 年から 3 年間瀬戸市が国庫補助を受けて生息分布調査を実施しています。平成 23 年には「第 8 回日本オオサンショウウオの会 瀬戸市（愛知県）大会」が瀬戸市の瀬戸蔵・下半田川町・東山動物園を会場に実施されました。

オオサンショウウオは、冬眠をせず年中活動をしませんが、主に夜行性で日中見かけることはあまりありません。7月頃から繁殖期に入り活動が活発化し、9月に川岸の巣穴で産卵します。産卵後の巣穴はオスの「ヌシ」が守り、40～50日後に孵化して幼生が誕生、2月から3月にかけて幼生は巣穴から川に出て巣立ちします。

オオサンショウウオの一年

オオサンショウウオの産卵は8月下旬から9月上旬にかけてです。1頭のオスが占有している産卵巣穴にメスが入り、続いて、巣穴の周辺に集結した他のオスも入って、1頭のメスと複数のオスで産卵行動をおこないます。私たちは巣穴を占有しているオスを「ヌシ」と呼んでいます。



(産卵後まもなくのヌシと受精卵 (平成25年9月26日))



(産卵から約21日後 (平成25年10月11日))



(孵化後4ヶ月あまり 全長4.5cm (平成28年1月13日))



(産卵後1ヶ月あまり (平成25年9月26日))



(孵化後1ヶ月あまり 全長3.1cm (平成25年11月7日))



(孵化後1年程 全長8.5cm (平成27年9月4日))

④^{いしろうじ} 蔭昌寺跡・明月庵跡

④-1 蔭昌寺跡（15 世紀末～17 世紀前葉）

蔭昌寺は、延徳 2(1490) 年に創建、開山は定光寺老師の観空公禪師で、元和 8(1622) 年に外之原村（現在の春日井市）に移ったと伝えられています。外之原村には定光寺末寺の長慶庵が正保 4(1647) 年にはあったと定光寺『由緒略記』に記され、その長寿庵の地に蔭昌寺から移された「臥牛山 林昌寺」が今日まで続く寺院となっています。

現在は、寺院の堂宇は残されていませんが、下半田川の集落を見下ろす尾根上に寺域の平場と宝篋印塔^{ほうきやういんとう}などが残されているのみです。宝篋印塔^{だらに}は、「宝篋印陀羅尼經」を納めて供養する石塔として鎌倉時代初期に成立しましたが、後に墓碑塔や供養塔として建てられる例も多くありました。蔭昌寺の宝篋印塔は、2 基確認され、やや小ぶりの硬質砂岩製のものと、花崗岩製のものとがみられます。ともに記念銘等が書かれていないため、由来については詳細不明ですが、「関西式」宝篋印塔として知られ、近



蔭昌寺跡の宝篋印塔・無縫塔



花崗岩製宝篋印塔（左側）



硬質砂岩製宝篋印塔（右側）

隣の美濃・三河にも類似した事例があり、明徳癸酉(1393) 年銘の岐阜県多治見市根本町の宝篋印塔等から 1400 年前後の年代に作成されたものと考えられます。伝承の年代よりも遡る年代ですが、延徳 2(1490) 年以前からこの地が寺院等であったことがわかります。

同所にある花崗岩製宝篋印塔も笠の四隅にある隅飾が垂直に立ち上がる特徴をもち、14 世紀を中心としたものであることがわかります。

参考文献

富田幹夫 2015「蔭昌寺の宝篋印塔」『やまびこ 第 13 号』掛川地域力向上委員会

④-2 明月庵跡（19 世紀）

蔭昌寺の西側麓、八劔社の南隣に、石垣が築かれた平坦地があり、ここに享和年間(1801～04)に阿弥陀堂（明月庵）が建立されたと伝えられています。蔭昌寺が外之原村に移った後に村に尼僧を迎えたもので、前述の蔭昌寺宝篋印塔の隣に文化15(1818)年から嘉永6(1853)年にわたり建てられた5人の尼僧の花崗岩製の無縫塔が並んでいます。無縫塔は、基礎の上に請花をのせ、その上に丸みを帯びた長い卵形の塔身を乗せるもので、僧侶の墓碑として建てられたものです。

その後、無住となり庵も焼失してしまったようですが、明治16(1883)年には、沓掛小学校より分かれた下半田川分校がここに開校し、東側尾根上の蔭昌寺跡の平場は、運動場として用いられたようです。小学校は、明治30(1897)年まで使われていました。

⑤ 八劔社

下半田川村の氏神社である八劔社の創建年代は明らかではありませんが、境内最古の石燈籠は貞享2(1685)年造ですので、それ以前から拝殿が建てられていたようです。熱田神宮の別宮に由来し、秋葉社・愛宕神社・津島社なども合祀されています。かつては、秋の例大祭には川東・川西・青年会から3頭の献馬奉納がなされ、火縄銃や棒の手も出て、賑わったそうです。



⑥木造阿弥陀如来立像・木造十一面観音菩薩立像・観音堂

⑥-1 木造阿弥陀如来立像(12世紀前半) 県指定

下半田川観音堂には平安時代の仏像が2体祀られていました。昭和48年以降には、それぞれ厨子の中に納められ、観音堂右手の文化財収蔵庫に安置され今日に至ります。

右手の厨子内には、円形の頭光を光背として伴い、蓮華座の上に立つ木造阿弥陀如来像(像高98.4cm)がみられます。これらの付属物は、後世に補われたものですが、12世紀前半の制作と考えられる体幹部はヒノキ材の一本造りで、内刳りはされていません。

左手は垂下させて掌を下に向け親指と人差し指で輪を作る印(「上品^{じょうぼん}」の印)、右手は胸の脇で掌を立てて上品の印を結んでおり、いわゆる上品下生^{げしやう}の「来迎印^{らいごういん}」をとります。首は三道相(ふくよかさを示す3本の線)で、額の白毫^{びやくごう}は石製(緑色(後世の補修))、肉髻珠^{にくけいしゆ}も石製(赤色(後世の補修))がみられます。上半身は偏衫^{へんさん}、下半身は巻スカートのような裙^{くん}を着て、それらの上に袈裟を纏います。

本像は、同所の木造十一面観音菩薩立像と比べ、衣文表現の意匠化と形骸化が進み、

体部の量感も減じていることから、やや時期が下がり、12世紀前半の造像と考えられます。表面の痕跡から、当初は前面に白色下地を施し、彩色仕上げしていたと考えられます。



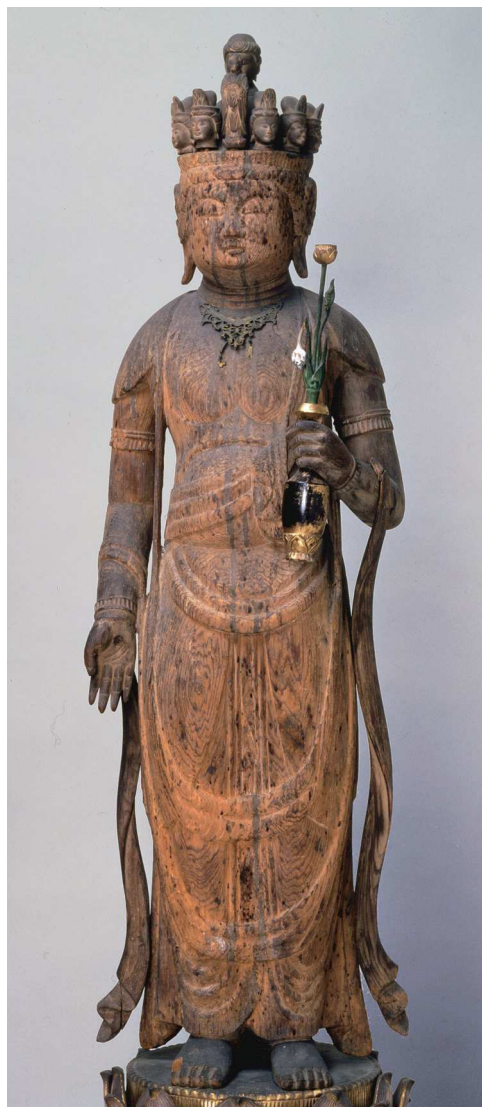
木造阿弥陀如来立像
下半田川町観音堂(瀬戸市)12世紀前半制作

⑥-2 木造十一面観音菩薩立像(11世紀後半) 県指定

収蔵庫左側の厨子内には、木造阿弥陀如来立像と同様、後世に補完された円形の頭光を光背として伴い、後世に補完された蓮華座の上に立つ木造十一面観音菩薩立像(像高111.3cm)が安置されています。額上の宝冠は失われていますが、頭の上に10面(髻頂に1面、側から後面に9面(後ろの3面のみ当初のもの))の仏面、正面に化仏立像がみられます。腰をやや左に捻り、右膝をやや前に出した立像で、ヒノキの一材より彫りだし、内削りは施していません。

垂下する左腕は折り返して水瓶を胸の前で執った形、右腕は全体を垂下させて掌をやや外に向け全指を軽く伸ばします。後世に補われた銅製の胸飾、二の腕につけられた臂釧^{ひせん}、手首につけられた腕釧^{わんせん}の表現がみられ、上半身の肩から腰に掛けて条帛^{じょうはく}がみられ、両腕には天衣^{てんい}が掛けられています。下半身には巻スカートのような裙を着て、表面には3条の天衣が横切っています。

やや下膨れの穏やかな表情の顔立ちで、腹部がやや張り出すなど、奥行のある造形となっており、量感に富んでいます。一方、浅く穏やかな衣文表現を考慮すると11世紀後半の造像と考えられます。本来は、肉身・頭髮・着衣ともに白色下地を施し、彩色仕上げであったとみられますが、現状では彩色はほとんど剥落しています。



木造十一面観音菩薩立像
下田川観音堂(瀬戸市)11世紀後半制作

【参考】平安時代の木造十一面観音菩薩像

8世紀末～12世紀後半の平安時代には、仏像彫刻も多様な変遷をたどります。平安時代前期の9世紀代のものは、密教の影響下で肩が張り気味で頭部幅や奥行が大きく丸みが強く頂上仏面も大きいのに対し、中期の10世紀代のものは頭部がやや小さくなり体部は肉身の自然な起伏を柔らかく表すようになります。後期の11世紀からは浄土教思想を背景に定朝様式が広くみられるようになり、浅い彫りと併行して流れる衣文と瞑想的な表情による定型的な和様彫刻が確立しますが、徐々に形骸化します。



十一面観音菩薩坐像
賢林寺(小牧市) 9世紀後半制作



十一面観音菩薩立像
密蔵院(春日井市)9世紀末～10世紀初頭制作



十一面観音菩薩立像
笠覆寺(名古屋市南区) 11世紀初頭制作



十一面観音菩薩立像
長慶寺(豊田市) 12世紀前半制作

下半田川C窯跡

下半田川C窯跡は、国道248号線「下半田川」交差点の南側にある小丘陵の南向き斜面にかつて存在した窯跡で、鎌倉時代中期の13世紀後半から14世紀前半にかけて無釉の日常雑器である「山茶碗」を生産していました。平成4・5年に発掘調査が行われた結果、2基の窯体（1号窯・2号窯）やロクロの跡を伴った工房跡などが見つっています（下図の「掘立柱建物」付近）。特に窯体の遺存状況は良好で、中でも1号窯の窯内には、積み重ねられた山茶碗が原位置を保った状態で確認されました。積み上げられた山茶碗は最大15個、その上に小皿を5個乗せており、さらにその上に蓋が被せられていました。こうした状況から、この窯の1回における山茶碗・小皿の生産個数がおおよそ5,000個であったことが明らかにされています。

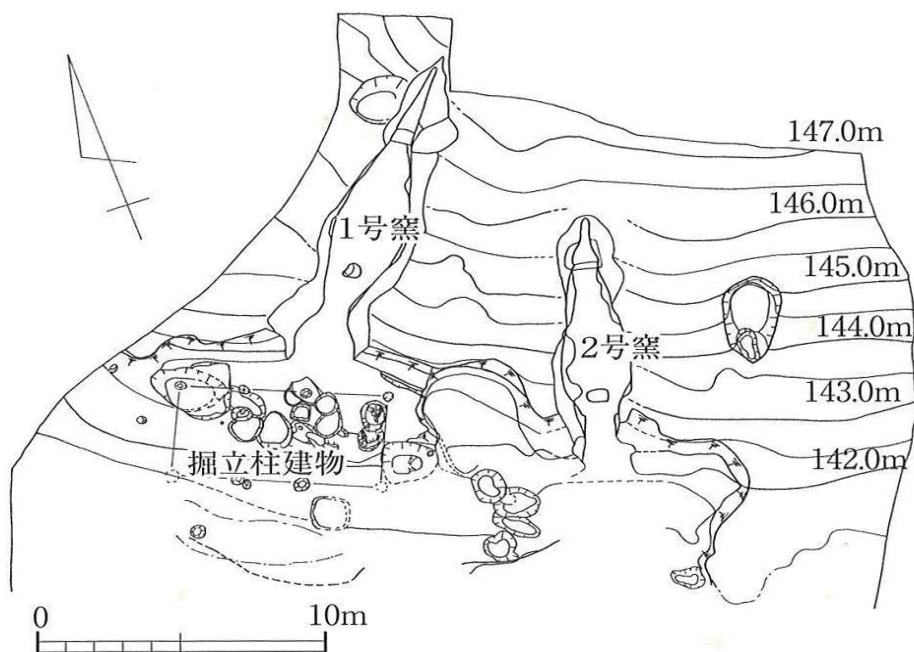
本窯跡で生産された山茶碗は、いわゆる「東濃型」と呼ばれる胎土が均質なもので、美濃窯で一般的に生産されていたものです。現在の瀬戸市域では、蛇が洞川周辺の丘陵地において、13世紀中頃に東濃型山茶碗を生産した窯の数が最も増加したことが知られており、本窯跡がそうした東濃型山茶碗生産の最盛期を担っていたことがうかがえます。



下半田川C窯跡 1号窯全景



下半田川C窯跡 1号窯山茶碗窯詰め状況



下半田川C窯跡 遺構配置図

まちめぐり
掛川地区(下半田川)コース



今後のスケジュール

<1月>

せと歴！ 水南のマメナシ界限3

日 時：1月20日（土） 午後1時～午後2時30分

集合・解散場所：水南小学校駐車場

内 容：市指定天然記念物「マメナシ」の樹勢を回復させるために、樹木医などの解説のもと、根本で小規模な掘り起こし作業を行います。

参加費：無料

★大人から小学生までどなたでも参加いただけます！

申し込み方法等、詳しくは広報せと12月15日号に掲載します。

瀬戸市歴史文化基本構想ホームページ

昨年度、策定した瀬戸市歴史文化基本構想や基本構想に関連した取り組みをホームページにて掲載しています。

これまでに開催した「まちめぐり」や「学び塾」の様子を紹介するとともに、「まちめぐり」の資料をダウンロードすることができます。

アドレス：<http://seto-cul.jp/rekibun/>

ぜひ、ご覧ください。



本事業は、平成29年度歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業（文化芸術振興費補助金）を活用して実施しています。

主催：瀬戸市歴史文化基本構想を活用した観光拠点形成のための協議会（瀬戸市交流活力部文化課）